

静岡県埋蔵文化財調査研究調査報告書 第117集

方 吹 遺 跡

平成9・10年度主要地方道掛川浜岡線特殊改良1種事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究調査報告書 第117集

方吹遺跡

平成9・10年度主要地方道掛川浜岡線特殊改良1種事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

方吹遺跡が所在する菊川町は静岡県西部地方のほぼ中央部にある。四方を丘陵地で囲まれた盆地に位置し、東側の牧之原台地を越えると大井川を臨むことが出来る。当町はその丘陵地の緩傾斜面を利用した茶業が盛んであることが、全国的に知られているが、町のほぼ中央部を流れる菊川流域は県内でも有数の弥生時代遺跡の分布地域としても知られている。特にその遺跡の名を挙げるならば、まず方吹遺跡の北側に隣接する白岩遺跡の名が挙げられよう。白岩遺跡は昭和23年には後藤守一・和島誠一・杉原莊介諸氏により最初の本格的な発掘調査が行われている。その後、東名高速道路開通、西方川の改修工事に伴う発掘調査が行われ、その度に木製品をはじめ弥生時代の良好な遺物が出土している。また田辺昭三氏らをはじめとする掛川西高校郷土研究部員により、出土跡生土器について精緻な分析がされた。その結果、弥生時代中期の土器形式である「白岩式」土器の標識遺跡としても知られることとなった。また隣接する地域では地元、菊川町教育委員会により精緻な発掘調査が最近実施されており、大きな成果を挙げつつある。この白岩遺跡は静岡市登呂遺跡と並び、静岡県の弥生文化の研究に際し、大きな指標となっている遺跡であり、今回の調査地点はその白岩集落の一画である可能性が想起されていた箇所でもある。

今回の方吹遺跡の埋蔵文化財調査は、主要地方道掛川浜岡線建設に伴うものである。第1遺構面から溝状遺構、第2遺構面では旧西方川の流路跡が検出された。これらは当時の白岩集落の領域を考察するのに貴重な情報を提供したものと言えよう。本報告が今後この地域の埋蔵文化財に対する一つの指針となり、結果的に地域住民の方々の歴史的意識の醸成につながれば誠に幸いである。

最後になったが、調査ならびに報告書作成にあたっては、静岡県袋井土木事務所・菊川町教育委員会などの関係機関各位に感謝すると共に、資料整理や寒気の中で現地調査に参加した調査員・作業員の労をこの場を借りてねぎらいたい。

平成11年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例 言

- 1・本書は静岡県小笠郡菊川町加茂白岩下地先に所在する方吹遺跡の発掘調査報告書である。
- 2・調査は平成9年度主要地方道掛川浜岡線特殊1種工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所からの委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が発掘調査を実施した。
- 3・現地発掘調査は平成10年2月から3月まで行った。整理作業は現地発掘調査と並行して現地発掘調査事務所において、一部基礎的な整理作業を行い、平成10年4月から遺物実測・図版作成等の本格的な整理作業を実施した。
- 4・調査体制は次のとおりである。
平成9年度（現地発掘調査）
所長 真藤 忠 副所長 池谷和三 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長兼調査研究一課長 栗野克己 調査研究二課長 佐野五十三
調査研究員 鈴木利明 勝又直人
平成10年度（整理作業）
所長 真藤忠 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長心得兼調査研究一課長 佐野五十三 調査研究三課長 足立順司
調査研究員 勝又直人
- 5・グリット基準杭の設定および空中写真撮影は㈱フジヤマに依頼した。
- 6・本書の遺物写真は当研究所技術職員 杉山すず代が撮影した。また石材同定は当研究所技術作業員 森島富士夫が行った。
- 7・本書の執筆は調査研究員 勝又直人が行った。
- 8・本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 9・全ての出土資料及び調査資料は静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 10・発掘調査および報告書作成に当たっては、次の方々から御教示・御指導を賜わった。記して厚くお礼を申し上げたい。（敬称略、順不同）
塚本和弘（菊川町教育委員会）・後藤和風（同左）

凡 例

本書における遺構表記（略号）は次のとおりである。

SD：溝状遺構 SR：自然流路

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査経過	
第1節 調査に至る経過	3
第2節 発掘調査の経過と方法	3
第Ⅲ章 遺構と遺物	
第1節 基本層序	6
第2節 検出遺構	7
第3節 出土遺物	11
第Ⅳ章 まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 菊川町位置図	1
第2図 遺跡位置図	2
第3図 グリット図・調査区位置図	4
第4図 國土座標図・左岸区基本土層図	5
第5図 左岸区第1遺構面図・第2遺構面図	7
第6図 SD01・02・04実測図	8
第7図 SD03実測図	9
第8図 SR01セクション図	10
第9図 右岸区確認トレンドセクション図	12
第10図 遺物実測図	13

挿 表 目 次

第1表 遺跡名一覧表1	2
第2表 遺跡名一覧表2	3

写真図版目次

- 図版 1 1・方吹遺跡遠景（南から） 2・方吹遺跡遠景（東から）
図版 2 1・左岸区第1遺構面全景 2・第1遺構面（南から）
図版 3 1・SD01（北から） 2・SD02（東から） 3・SD03（北から）
図版 4 1・SD04（東から） 2・SR01（西から） 3・SR01東壁セクション（西から）
図版 5 1・左岸区第2遺構面全景（南から） 2・右岸区確認トレンチ（SR01付近・南から）
3・杭出土状況（東から）
図版 6 1・出土土器・石器集合写真 2・出土木製品展開写真



左岸区第1遺構面調査風景



右岸区確認トレンチ調査風景

第Ⅰ章 位置と環境

方吹遺跡は静岡県小笠郡菊川町加茂白岩下地先に所在する。調査区が面している西方川は菊川の一支流で、西方最北部の掛川市境付近から南東方向に、さらに堀田付近で大きく蛇行し南へ流路をとる。そして遺跡から南へ約2.1km下った月岡付近で合流する。菊川は掛川市東北部栗ヶ岳付近に源を発し、菊川町・小笠町・大東町を経て遠州灘に注ぐ河川で、この川に由来する堆積物により菊川平野は形成されている。遺跡が位置する付近一帯は西側に掛川丘陵、東側には西方川によって形成された沖積地が広がっている。その沖積地は基本的にシルト・粘土等が時間をかけて堆積しており、砂・砾層の堆積があまり見られない。菊川平野周辺には菊川によって形成された河岸段丘が第5段丘まで形成されている。遺跡周辺に見られる舟岡山・白岩下は第5段丘の中でも4段目すなわち、最も新しい時期に形成された段丘である。これらの段丘には神谷城跡岩層に由来する円礫を含む礫層が見られ、沖積地とは堆積物の点において様相が異なっているのがわかる。

菊川町内において旧石器時代の遺物が確認されているのは三沢西原遺跡である。牧之原台地辺部に広がる河岸段丘上に位置する。町内、特に西方川流域において旧石器時代の資料はこの例の他に知られていない。縄文時代の遺跡については、菊川周辺の沖積地・河岸段丘・丘陵部等においても確認されている。遺跡の西側、標高40～50m程度の丘陵部には井成山遺跡が位置し、縄文～奈良期の遺跡の存在が推定されている。西方川の東側間橋付近には白岩下遺跡、その西、菊川第5段丘である白岩段丘付近にも縄文～弥生期の遺跡が確認されている。西方川が大きく蛇行する堀田地内、豆尻橋周辺においては、縄文中期後葉に位置付けられる土器片・打製石斧が表採されていることから、縄文期における西方川流域の様相も今後の検討すべき課題と言えよう。弥生時代における西方川流域の様相を検討するうえで白岩遺跡は除外できない遺跡である。方吹遺跡から北へ約200mの位置にある八幡橋付近から、東名高速道路を越え、北へ約400mの位置にある打上橋付近までの一带は白岩遺跡の範囲として認識されている。この遺跡は昭和22年の河川改修工事の際に発見され、翌年、後藤守一・和島誠一・杉原莊介らにより、今回の調査地点より北へおよそ200m付近にかかる八幡橋上流で調査を行っている。また昭和41年には東名高速建設に伴い内藤晃・市原寿文氏らにより現地調査が行われている。その際には集落域が検出されている。昭和48～49年にかけては、大場磐雄・榎原松司らにより八幡橋南側において全国でも類例のない「棒(かせい)」が出土している。また昭和26年の河川改修工事に伴い、土中より出土した遺物を田辺昭三らをはじめとする静岡県立掛川西高校郷土研究部員が整理・報告し、さらに弥生土器を中心に精緻な分析を試みている。最近、今回の調査地点の東側一帯の地域では、菊川町教育委員会により方形周溝墓が調査されており、白岩集落の墓域として考えられよう。このように今回の調査区周辺地域においては、かねてから白岩の集落跡を中心とした調査事例が多く受けられるものの、正式な報告が少なく、今後様々な調査成果を踏まえた総合的な白岩集落についての検討が期待されている。古墳時代の遺跡については横穴墓の分布、中世以降の遺跡としては皿山古窯跡群や横地城跡・伊平遺跡等の遠江の国人領主であった横地一族の旧跡等が特筆されよう。



第1図 菊川町位置図



第2図 遺跡位置図 (1 : 25000)

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	方吹遺跡	弥生～近世	14	西ノ谷横穴群	古墳（後）	27	高田ヶ原遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良
2	谷田部遺跡	绳文（中・晚）	15	猿ヶ谷横穴群	古墳（後）	28	高田ヶ原古墳群	古墳
3	八王子遺跡	奈良～鎌倉	16	天白浦古墳	古墳	29	豆尻遺跡	弥生（後）・古墳・古代
4	下ノ段古墳	古墳	17	八斗田遺跡	奈良	30	栗林遺跡	弥生・古墳・古代
5	下ノ段遺跡	弥生	18	西宮横穴群	古墳（後）	31	八幡遺跡	弥生（後）・古墳
6	長泉寺遺跡	中世	19	大瀬谷横穴群	古墳（後）	32	八幡古墳	古墳
7	東糸妙遺跡	古代	20	山本横穴群	古墳（後）	33	打上・塩鳥遺跡	縄文・鎌倉
8	八斗田遺跡	古代	21	堀田遺跡	古代・中世	34	大應寺古墳	古墳
9	前田坪遺跡	古代	22	堀田城	中世	35	前田遺跡	弥生
10	山田遺跡	縄文（中）	23	椎原尾遺跡	縄文（草）	36	鹿島古墳	古墳（後）
11	中島遺跡	縄文・弥生・古墳・平安	24	堀田山	古墳・中世	37	井成山遺跡	弥生・古墳
12	烏経遺跡	中世	25	御前遺跡（豆見尾）	弥生・古墳	38	白岩遺跡	縄文・鎌倉
13	椎左衛門遺跡	古墳（前）・平安・鎌倉	26	高田ヶ原古墳群	古墳（中）	39	鳥遺跡	縄文（後）～弥生

第1表 遺跡名一覧表 1

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
40	下本所A横穴群	古墳（後）	58	白岩Ⅱ遺跡	绳文（中）	76	月岡Ⅲ堆	弥生・古墳・中世・近世
41	下本所B横穴群	古墳（後）	59	白岩Ⅲ遺跡	弥生（後）・古代	77	朝実遺跡	古代
42	ウチワヤ横穴群	古墳（後）	60	白岩下Ⅰ遺跡	绳文（晚）	78	辻の原遺跡	古代・中世
43	新井遺跡	古墳	61	白岩段Ⅱ遺跡	弥生（後）	79	御門前遺跡	弥生・中世
44	四枝遺跡	弥生・平安・鎌倉	62	白岩段Ⅲ遺跡	弥生（中）	80	東の原跡（廻所）	弥生・中世
45	下田遺跡	古墳	63	西袋遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	81	御門Ⅰ遺跡	弥生（後）
46	下田横穴群	古墳（後）	64	広原遺跡	绳文	82	喜多山・谷遺跡	弥生（後）・古代
47	小出遺跡	绳文・弥生	65	山田横穴群	古墳（後）	83	御門Ⅱ遺跡	弥生（後）
48	上ヶ城	中世	66	市ヶ原遺跡	绳文・弥生・古墳・平安	84	下の坪遺跡	古代
49	樋木遺跡	平安・鎌倉	67	長池北遺跡	弥生（後）	85	森原遺跡	弥生（後）・古墳・奈良
50	深川横穴群	古墳（後）	68	愛地兼跡	绳文・弥生・古墳・中世	86	森原横穴群	古墳（後）
51	一の坪遺跡	古代・中世	69	長池横穴群	古墳（後）	87	表前外堀遺跡	弥生・鎌倉
52	小出横穴群	古墳（後）	70	杉森山・塙群	古墳	88	正元寺原遺跡	古代・中世
53	藤谷A横穴群	古墳（後）	71	杉森横穴群	古墳（後）	89	政所D横穴群	古墳（後）
54	藤谷B横穴群	古墳（後）	72	長池内塙群	古墳	90	政所E横穴群	古墳（後）
55	御領所遺跡	平安・鎌倉	73	長池南古墳群	绳文・奈良・平安	91	内田御屋敷遺跡	弥生（中）
56	小川辺Ⅰ遺跡	古代・中世	74	原山遺跡	弥生	92	綾畠山1号横穴	古墳（後）
57	小川辺Ⅱ遺跡	弥生・古墳	75	助九郎遺跡	弥生	93	政所遺跡	弥生（後）・古墳（後）

第2表 遺跡名一覧表2

第Ⅱ章 調査経過

第1節 調査に至る経過

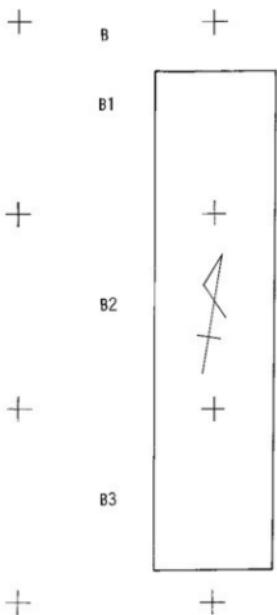
遺跡の位置する菊川町は静岡県西部地区のはば中央部に位置する。遠州灘に面する浜岡町・大東町方面から、車両が多く、町内はかねてから慢性的な渋滞が問題となっていた。そのような中において掛川・浜岡線バイパスの敷設工事が開始された。このバイパスは遠州灘沿岸地区から掛川・菊川地区へのアクセス、また静岡国体の野球会場へのアクセス道としても位置付けられている。そうしたなか西方川に架橋する工事の予算化がなされた。周辺地域では区画整理事業に伴って、菊川町教育委員会による発掘調査がなされ、特に今回の施工区域に近接した一画からは弥生時代中期から近世にかけての遺構面3面が検出され、自然流路から大量の遺物が出土していた。静岡県袋井土木事務所・静岡県教育委員会文化課・菊川町建設課・菊川町教育委員会の四者で協議がなされ、架橋工事に先立って発掘調査を実施することが確認された。菊川町教育委員会が対応することは安全対策の点からも難しく、また、町道の建設や区画整理の実施に伴う調査などが予定され、不可能であったことから当研究所へ発掘調査を依頼することが決定された。

調査自体が緊急性を要したこと、すでに隣接地において菊川町教育委員会の調査が実施されていることから、その成果を参考に調査計画を立てることとした。今回の調査区は西方川堤防に位置し、堤防自体の保全がどうしても必要であり、かつ軟弱な粘土・シルト質の土壤を3m以上掘り下げる必要となることから、調査区の周囲に鋼矢板を打ち込むことになった。鋼矢板の打ち込み工が当初予定より遅れたこともあり、平成9年度は西方川の左岸区の調査を、右岸区の調査は平成10年度に実施することとした。

第2節 発掘調査の経過と方法

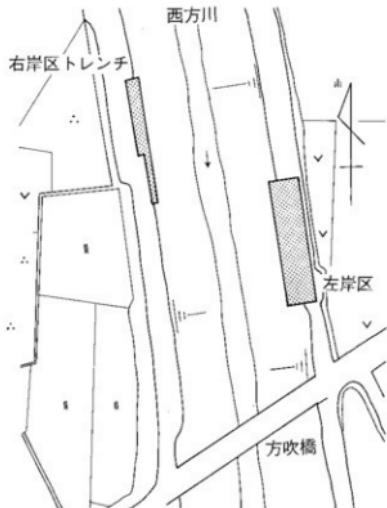
1・調査経過

平成10年1月第5週から発掘資材の準備を実施。2月第1週から現地事務所の開設を行い、第2週



から発掘機材搬入を開始し、合わせて周辺地域の住民に遺跡発掘調査の挨拶に回った。今回の調査区は西方川の両岸堤防上に位置し、さらに堤防上面から第2遺構面の遺構底面まで少なくとも3m以上は掘り下げを実施することが想定されていたため、鋼矢板で調査区の周囲を囲む必要性が生じていた。この鋼矢板の打ち込み工が第3週に実施された。その作業に並行して、排土置き場の土留め設置作業を行った。排土置き場の周囲が民地、もしくは未買収のバイパス予定地とされていたため、排土の崩落・流出防止に対して手段を講ずる必要性が生じたためである。左岸区において重機を投入しての表土除去を実施できたのが、第4週になってであった。第4週～3月第1週にかけて第1遺構面の遺構掘り下げ作業を実施した。第2週に空中写真撮影を実施。終了後に第2遺構面の遺構の存在が想定される箇所に確認トレーニングを設定、掘り下げを行ったが、遺構の存在が確認出来なかった。よって菊川町教育委員会が存在を確認している第2遺構面の調査は実施せず、第2週からは自然流路中の遺物包含層の存在が想定された第3遺構面の調査に移った。自然流路の確認面から流路底部までは少なくとも1m以上あり、調査期間も限られていることから、遺物包含層の存在すると推定される標高付近まで重機で掘り下げを行い、さらに人力で精査を行ったが、遺物は確認できなかった。そこで遺物包含層がさらに下位の層である可能性もあり、流路底部付近まで掘り下げを行っているが、遺物の出土は確認できなかった。

このような調査結果を受けて、平成10年度調査を実施する予定であった右岸区についても、緊急に遺構・遺物の有無の確認を行うように、県教育委員会より指導を受けた。3月第4週には左岸区調査資材の撤収と同時に並行しながら右岸区に確認トレーニングを設定、重機により掘り下げを行った。その結果、遺構らしき落ち込みは確認できず、また左岸区から続く自然流路は検出したものの、流路中の



第3図 上・グリッド図、下・調査区位置図 (1:1000)

遺物包含層は検出することが出来なかった。この結果、4月からの右岸区の調査は行われず、継続して整理作業を実施することとなった。

整理期間はその見込まれる作業量から、関係機関との協議の結果、平成10年4月から1ヶ月間に設定された。整理作業は、まず遺物図版と遺構図版の作成作業から開始された。遺物については図化終了後、写真撮影を行った。さらに出土した石器については石材鑑定、木製品については樹種鑑定を実施している。これを受けて原稿執筆および編集作業に入り、その終了後、遺物・調査関係記録類等の収納作業を実施した。

2・調査方法

右岸区の範囲は26m×6mの長方形を呈し、調査区が位置する場所は堤防上ということもあり、鋼

X : -139090 + + + +

矢板が打ち込まれた内部を遺構
検出面まで重機で掘削した。遺
構の掘り下げは人力で行ってい
る。測量に用いる基準杭は調査
区に沿った方向で打ち込みを行
った。グリットの呼称は、東か
ら西へはアルファベット、北か
ら南へは数字での組み合わせで
行っている。調査区のグリット
方向と国土座標方位の関係は第
4図に示した。調査地点におい

X : -139095 + + + +

X : -139100 + + + +

X : -139105 + + + +

X : -139110 + + + +

X : -139115 + + + +

X : -139120 + + + +

X : -139125 + + + +

y : -36940
y : -36935
y : -36930
y : -36925

18.00 m
17.00 m
16.00 m
15.00 m

I
II
III
IV
SR
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII

第4図 左・国土座標図(1:250)、右・左岸区基本土層図(1:40)

て湧水の可能性があったため、調査区内に排水溝を巡らし、さらにセンサー付100V水中ポンプを設置し、當時排水可能な状態を保持した。

検出した遺構には当研究所の整理番号に準じ、溝状遺構にはSD、自然流路にはSRとし、検出された順に通し番号を付与していく。出土した遺物には、土器にP、石器にはS、木製品にはW番号を付与した。基本的整理作業である遺物洗浄・注記作業については現地発掘作業と並行して実施している。

現地の記録については、遺構平面図・土層堆積状況図を作成、また写真撮影を行っている。図面の縮尺は1:20~40で作成している。写真撮影については6×7判(白黒)・35mm(カラー・カラースライド・白黒)で写真で記録している。遺構の全景写真はラジコンヘリを使用し、空中写真撮影を実施している。

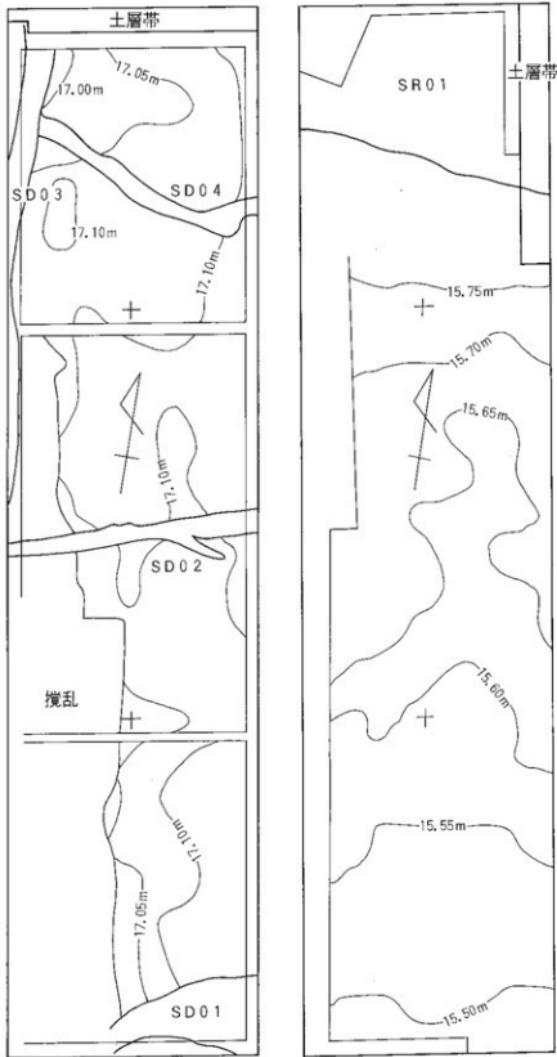
第Ⅲ章 遺構・遺物

第1節 基本層序

遺跡周辺は西方川の沖積地で、粘土・シルト類などの堆積物により構成されている。調査区ではほとんど砂・小砾等の堆積・混入は認められず、粒子の均質な土層を多く確認した。調査区一帯は最近に至るまで水田耕作地として利用されてきたため、本来土壤が有する色調は稻株等に由来すると思われる酸化鉄が多く土中に含まれるために、判別が困難な例があった。また粘土はかなりの粘性・しまりを有し、湿り気を帯びた状態でも調査時の堀削作業にはかなりの労力を必要としている。

第4図に示したのは左岸区の基本土層図である。今回の左岸区は全体的にプライマリーな堆積を観察されているが、調査区の周囲が鋼矢板で囲まれている状況では土層の恒常的な観察は不可能であった。よって第1遺構面では調査区北壁、第2遺構面では自然流路SR01東壁に土層帯を設け、両者の土層堆積状況を参考に模式図化したのが第4図である。

I層は堤防盛土である。碎石・砂利等を多く含んでいる。II層は暗灰色粘土である。部分的に堆積が見られない箇所がある。堤防以前の水田耕作土か。III層は青灰色シルト質粘土である。全体的に酸化鉄が見られる。IV層は灰色シルト質粘土である。上層と比べ酸化鉄はあまり見られない。この層の下位から土器片の出土が見られる。この層の上面で遺構の検出も想定されたが、今回の調査では検出されていない。V層は青灰色シルト質粘土である。この層上面で遺構プランが確認された。この層位上位に酸化鉄が多く見られたため、溝状遺構の覆土との識別は容易であった。今回の調査ではV層面を第1遺構面としている。右岸区確認トレチの成果ではV層に対応する層面で自然流路の落ち込みが確認されている。今回の左岸区の調査では土壤が確認できなかったが、V層面に自然流路のプランが存在した可能性がある。VI層は淡青灰色粘土である。酸化鉄が少量認められる。VII層は灰色粘土層である。酸化鉄が微量認められる。この層の上面で自然流路の明瞭なプランを確認できた。VIII層は青灰色シルト質粘土である。酸化鉄が微量認められる。上層のVII層との層界が乱れていることから、その層界の乱れは擾拌痕、VII層自体は水田耕作土の可能性がある。第2遺構面の調査時は畦畔の有無を確認するために、VIII層の中位付近まで精査を行っている。なおI~VII層にはカーボンが微量であるが混入している。IX層以下は水平堆積をしており、耕作等人間の手が加わった痕跡は認められなかった。IX層は灰色シルト質粘土である。X層は暗灰色シルト質粘土である。XI層は灰色シルト質粘土である。IX層と比べわずかに淡い色調である。XII層は暗灰色シルト質粘土である。X层と比べわずかに淡い色調である。VIII層



第5図 左・左岸図第1遺構面図、右・第2遺構面図 (1:120)

左岸区第1遺構面 (第5図・写真図版2)

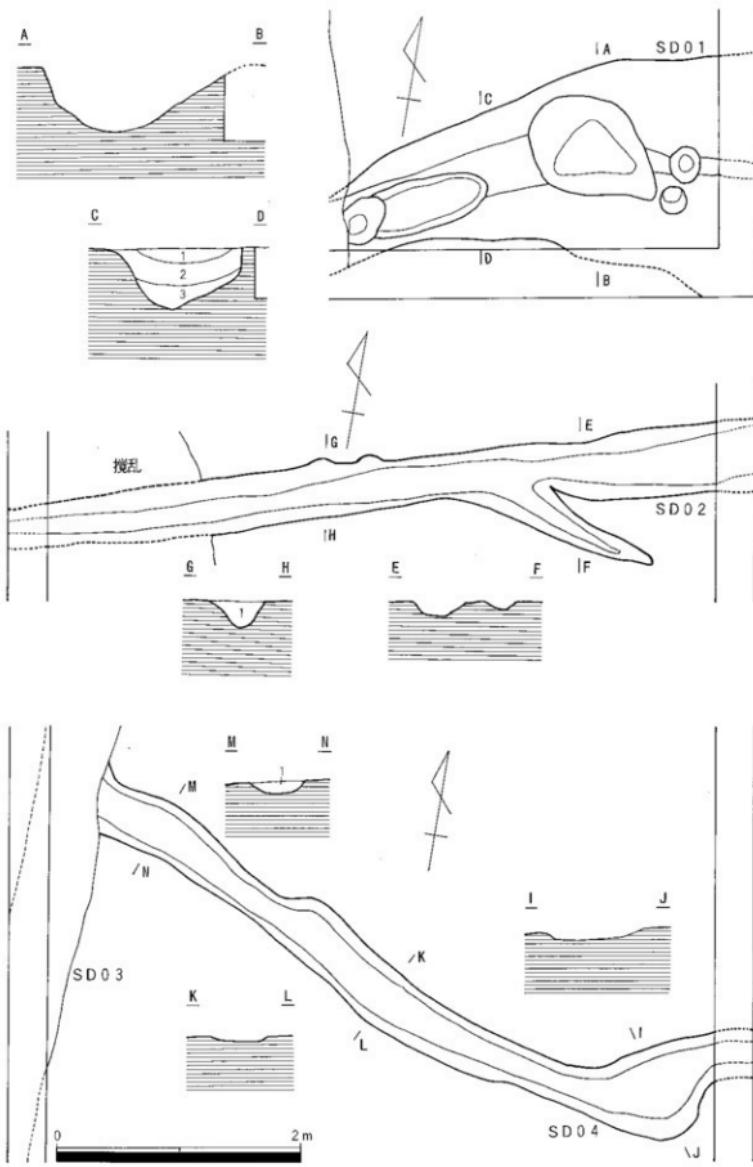
第1遺構面は基本土層のV層上面において検出された。遺構面はほぼ平坦な地形であるが、わずかに

層は灰色シルト質粘土である。XIV層は灰色シルトである。IX～XIV層にはカーボン粒・砂礫等の混入物は認められなかつた。

第2節 検出遺構

遺構の概要

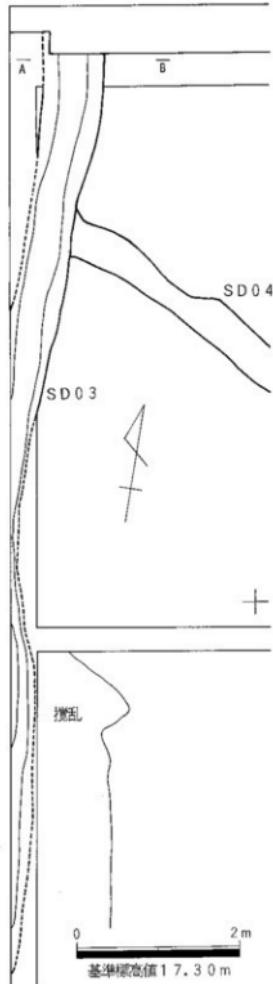
方吹遺跡左岸区においては遺構面を2面検出している。左岸区に隣接している一帯においては、平成7年度に菊川町教育委員会が実施した調査では遺構面を3面検出している。よって今回の調査においても3面存在することが想定された。しかしながら、今回の調査では、町教育委員会が調査した第2遺構面に該当する層位において遺構の存在が確認できなかった。本報告では溝状遺構を4基検出した面を第1遺構面、自然流路を検出した面を第2遺構面と呼称することにした。第2遺構面は町が調査した第3遺構面に該当するものと推定される。なお右岸区確認トレンチでは自然流路を1基検出した。本節においては調査区・検出した遺構の種類ごとに記載する。



第6図 SD01・02・04実測図



西へ向かって傾斜している。標高値は17.00m～17.10m付近を測る。調査区西辺部付近は1975年の西方川の河川改修工事の際にすでに破壊されている。



溝状遺構 (SD)

SD 01 (第6図・写真図版3-1)

SD 01は左岸区南端部付近、グリットA-3・B-3に位置する。溝の西側は擾乱により破壊されている。溝の向きは東から西へ延びている。形状は西へ向かって抉まっており、溝自体の幅は西側で約0.7m、東側で約2.0mを測る。底部には数ヶ所、土坑状の掘込みが認められた。その内部から砾石が1点出土している。溝の覆土は灰色シルト質粘土で、さらに3層に分層された。1層は酸化鉄を多量、カーボン粒を少量含んでいる。2層は酸化鉄を多量、カーボン粒を微量含んでいる。3層は酸化鉄を若干、カーボンを大量に含んでいる。覆土の灰色シルト質粘土は基本土層IV層に類似する。遺物は弥生時代以降の土器片が35点、砾石が1点出土しているが、土器片は細片に近く図示できなかった。

SD 02 (第6図・写真図版3-2)

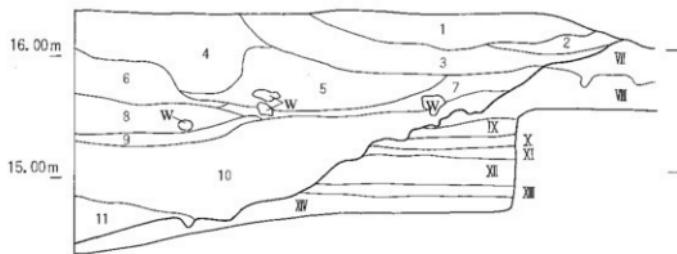
SD 02は左岸区のはば中央部付近、グリットA-2・B-2に位置する。溝の西側は擾乱により上場は破壊されており、判然としない。溝の向きは東から西へ延びている。形状は溝状遺構の北・南北両側辺がほぼ並行に延び、その間隔は約40～60cmを測る。また調査区の東壁から約1.5mの位置で南東方向からの浅い溝と合流している。合流した溝は浅かったため、合流部から約1.5m付近で削平されていた。溝の底部は比較的平坦である。覆土上位より土器片が出土している。溝の覆土は灰色シルト質粘土で酸化鉄を多量、カーボン粒を微量含んでいる。覆土は基本土層IV層に類似する。遺物は弥生時代以降の土器片が9点出土しているが、細片に近く図示できなかった。

SD 03 (第7図・写真図版3-3)

SD 03は左岸区北西部隅付近から調査区西壁に沿うような位置で検出された。グリットB-1・B-2に位置する。溝の大半は排水溝設置のため、上場は判然としない。溝の向きは東から西へ延びている。形状は溝状遺構の東・西両側辺がほぼ並行に延び、その間隔は60～70cmを測る。溝の底部は比較的平坦である。溝の覆土は2層に分層された。1層は黒褐色粘土である。酸化鉄を微量、カーボン粒を微量含んでいる。2層は褐灰色粘土である。酸化鉄を微量、カーボン粒少量含んでいる。遺物は弥生時代以降の土器片が9点出土している。2層下位から出土した土器片を1点図示した。

第7図 SD 03 実測図

覆土は前述の溝状遺構とは異なっており、また後述するSD 04を切っていることから、時期的に後出



- 1・灰色シルト質粘土（わずかにラミナ状に観察される。カーボン微量・腐植物を多量含む。）
- 2・灰色シルト質粘土（全体的にラミナ状を呈する。腐植物を微量含む。）
- 3・暗灰色シルト質粘土（カーボン粒・腐植物を多量含む。）
- 4・暗青灰色粘土層（砂粒少量含む。腐植物は含まない。）
- 5・灰色シルト質粘土（カーボン粒・流木等腐植物を多く含む。）
- 6・灰色シルト・灰色粘土ラミナ層（シルトは色調がやや暗い。腐植物を微量含む。）
- 7・灰色粘土（砂粒を微量含む。下位に腐植物を多く含む。）
- 8・灰色シルト・灰色粘土・腐植物ラミナ層（6層に比べてラミナ発達。カーボン粒微量含む。）
- 9・灰色シルト質粘土（ラミナがわずかに観察される。カーボン粒を微量、腐植物を多く含む。）
- 10・灰色シルト質粘土（下位に腐植物がラミナ状に多く堆積。一部、Ⅳ層土を少量塊状に含む。）
- 11・灰色粘土（粘性強し。カーボン粒・腐植物を極微量含む。）

第8図 SR 01 セクション図 (1:40)

する遺構であることが推定される。

SD 04 (第6図・写真図版4-1)

SD 04は左岸区の北部付近、グリットA-1・B-1に位置する。溝の西端はSD 03により破壊されており、判然としない。溝の向きは北西方向に向かっている。形状は溝の東部付近で約70cm程度、広がる箇所があるものの、溝状遺構の北・南側刃がほぼ並行に延び、その間隔は30~50cmを測る。溝の底部は比較的平坦である。遺物は出土していない。溝の覆土は灰色シルト質粘土で、酸化鉄を多量、カーボン粒を極微量含んでいる。この遺構は前述しているように重複関係からSD 03に時期的に先行するものと推定される。遺物は出土していない。

左岸区第2遺構面 (第5図・写真図版5-1)

第2遺構面は基本土層XIII層付近で検出している。遺構面はほぼ平坦な地形であるが、わずかに南へ傾斜している。調査区の北端部付近においては自然流路(SR 01)を検出した。調査区の大半の部分は畦畔らしきプランは検出できなかったが、XIII層上面の層界の乱れが搅拌痕と推定されることから、水田耕作が行われていた可能性がある。

自然流路 (SR)

S R 0 1 (第8図・写真図版4-2・3)

S R 0 1 は左岸区北端部付近、グリットA-1・B-1に位置する。覆土上層が基本土層V層に類似した土質であったために、第1遺構面上においてプランは確認できなかったが、VI層付近でようやくそのプランを検出した。流路の北辺は調査区外にあり検出できなかった。流路の向きは北西から南東方向に向かって延びている。当時の水流の方向も同様と考えられる。流路の底部は調査区北壁付近で検出面から約1.9mを測るが、調査区外に向かって底部がさらに傾斜する状況が観察された。この点から流路跡の中心部もさらに北側に位置していた可能性がある。流路の覆土はシルト質粘土を中心に堆積し、各層位にはラミナが観察されている。覆土中には大量の植物遺体、特にシラカシ・アカガシ・イチイガシ・アラカシ等の葉や、ヒシ・トチ・オニグルミ・ヒメグルミ・モモ等の種子が見られた。土器や木製品など人工物・人為的な加工痕を有する遺物は出土しなかった。

右岸区確認トレント (第9図・写真図版5-1・2)

右岸区の調査は平成10年度に予定されていたが、左岸区の調査結果を受けて、静岡県教育委員会の指導のもと急遽実施された。既に調査予定地は鋼矢板が打ち込まれていた状況で、調査区東壁に沿った位置でトレントを掘削した。第9図はトレント西壁のセクション図である。左岸区基本土層II・III層に該当する層位が見られず、左岸区の第1遺構面を検出した基本土層V層に該当する層位がIV層と判断された。層位面標高値は左岸区より約1.0cm程高い約1.7,2.0m付近を測る。左岸区で検出できた溝状遺構等のプランは検出できなかった。ただし左岸区第2遺構面で検出できたS R 0 1 と同一のものと判断される流路跡を検出した。左岸区同様 S R 0 1 として報告する。このトレント内部からは弥生時代以降の土器の破片が47点出土している。いずれの土器も表面が摩耗・剥脱し、細片に近い。ある程度形状の判断した土器を1点のみ図版に掲載している。出土した土器片は右岸区II層下位からII層上面にかけて出土している。またS R 0 1 南端に堆積している4層中でも数点だが土器片の出土をみている。

S R 0 1 は調査区南端から約1.0m付近の位置で、S R 南辺を検出している。北辺は調査区外にあり検出できなかった。流路の向きは北西から南東方向へ延びているものと推定される。検出された位置が左岸・右岸両調査区の位置関係から、この流路が左岸区S R 0 1 と接続するものと考えられ、弥生時代の流路が大きく蛇行していた様子が看取されよう。今回のトレントは流路検出面から約2.5mの深さまで掘削しているが流路底部は検出できなかった。流路南端から約4.3m、流路検出面から1.4mの位置で杭を1点検出している。杭は地山に打ち込まれたように、先端を下に向けて出土している。杭の計測値からも護岸用の杭とは考えられない。この付近から弥生時代以降の土器細片が2点出土している。また杭周辺から流木や植物遺体が若干出土している。

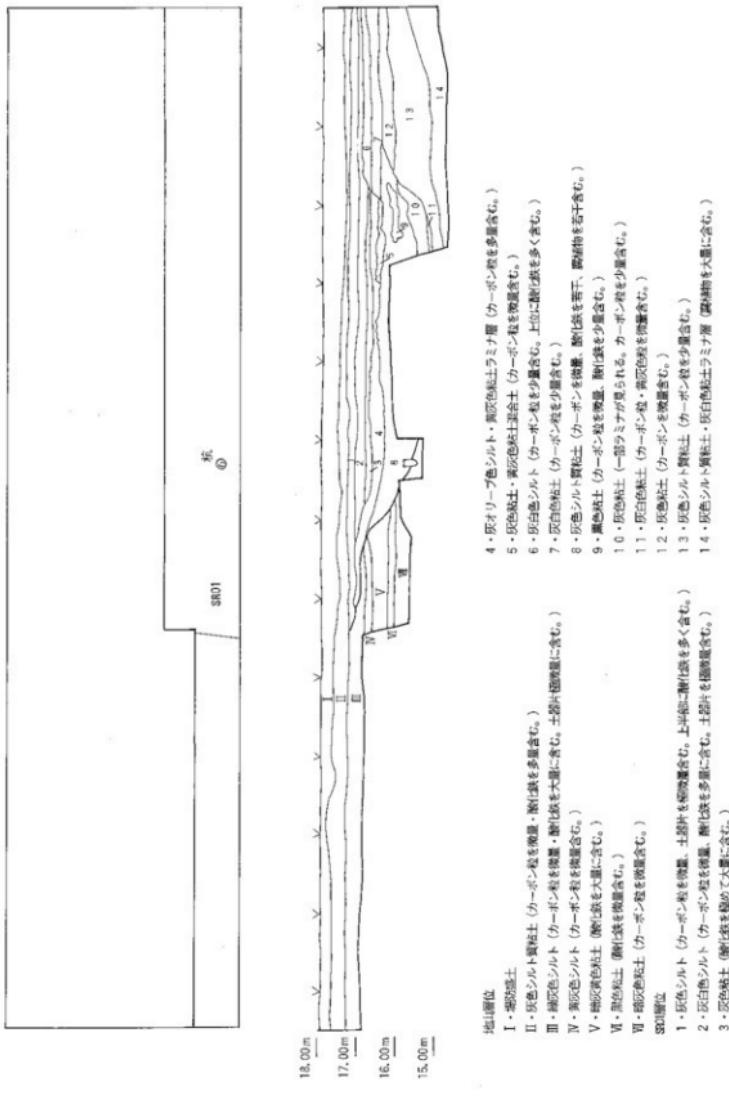
第3節 出土遺物

遺物の概要

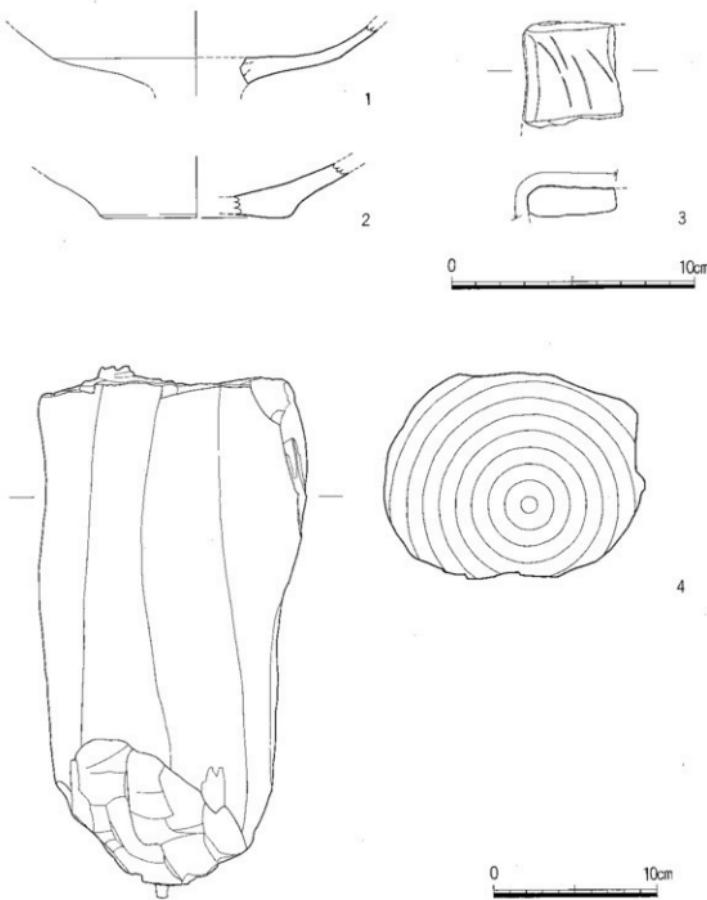
方吹遺跡左岸区・右岸区トレントにおいて出土したのは弥生時代以降の土器破片72点、石器1点、木製品1点である。土器についてはそのほとんどが細片に近く、表面が摩耗、もしくは剥脱し、図示しえない資料であった。その中で図示できたものが2点である。

土器 (第10図・写真図版6-1)

1は高坏の破片である。口縁部・脚部は欠損している。表面はかなり摩耗している。S D 0 3 から出



第9図 右岸区構認トレンド セクション図



第10図 遺物実測図

土している。時期は古墳時代前期～中期と推定される。2は壺の底部破片である。底径は約7.5cm程度と推定される。底部には木葉痕がわずかに観察される。右岸区トレンチからの出土である。時期は弥生時代中期～後期と推定される。

石器（第10図・写真図版6-1）

3は砥石である。一部欠損している。石材は石英質粗粒砂岩を使用している。SD01から出土している。時期は弥生時代以降と推定される。

木製品（第10図・写真図版6-2）

4は杭である。長さ32.4cm、幅16.4cm、厚さ12.5cmを測る。上端部は多方向から刃を入れ、切り落としている。下端部は三方向から刃を入れ加工している。加工痕が明瞭に観察される。加工斧の刃部幅は、その加工痕から約3cmと推定される。木材はイヌマキを使用している。計測値からこの杭は護岸用とは考えられず、用途は不明である。

第IV章　まとめ

今回の方吹遺跡の調査の結果、左岸区第1遺構面には溝状遺構が4基、第2遺構面には自然流路を1基確認した。また第2遺構面に水田の存在が推定された。また右岸区トレンチにおいては左岸区に続くと推定される流路を検出した。また今回の出土遺物の状況からは、今回の調査区は集落、すなわち白岩付近を中心で営まれた弥生時代の集落からはやや距離をおいた立地であったことを物語る。検出された溝状遺構の所属する時期は出土土器から弥生時代以降とまず推定できるものの、細片が多く決定的ではない。これらの溝状遺構、特にSD03より時期的に先行するとと思われるSD01・02・04の底部標高値が東から西へ下がる状況が観察されている。この点から溝状遺構が調査区から西方向に流れの方向を変えた自然流路へ排水を意図して掘削・機能したものと推定される。これらの溝はおそらく自然流路埋設後に掘削されたものであることは間違いない。時期的には古墳時代以降、中世まで下る可能性がある。

白岩遺跡の集落域は東名高速道路建設工事の際、内藤晃氏らにより調査がされている。また最近、菊川町教育委員会により西方川左岸一帯を土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施されており、方形周溝墓・水田跡が確認されている。これまでの白岩・方吹遺跡の調査成果を総合すればこの地域一帯の弥生期における集落の様相が見えてくるものと思われる。さらに菊川町による成果が出された時には、より一層明らかになるものと言えよう。

参考文献

- 田辺昭三 「小笠郡加茂村白岩下流遺跡調査報告」（臘写版） 静岡県立掛川西高等学校郷土研究部 1951年
- 大庭正八 『菊川町の生い立ちーその地形と地質についてー』 菊川町文化財保護委員会 刊行年不明
- 大庭正八 『菊川流域の河岸段丘』『静岡地学』11号 1968年
- 市原寿文 『静岡県小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査概報』『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 日本道路公団・静岡県教育委員会 1968年
- 大場磐雄・榎原松司・石川和明 『小笠郡菊川町白岩遺跡発掘調査略報』白岩遺跡調査団 1974年
- 鈴木則夫・篠原修二・石川方巳 『白岩遺跡発掘調査概報』 菊川町教育委員会 1983年
- 水島和弘・鳥田冬史 『豆尻Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 菊川町教育委員会 1988年
- 菊川町教育委員会 『菊川町文化財年報』第3号 1996年

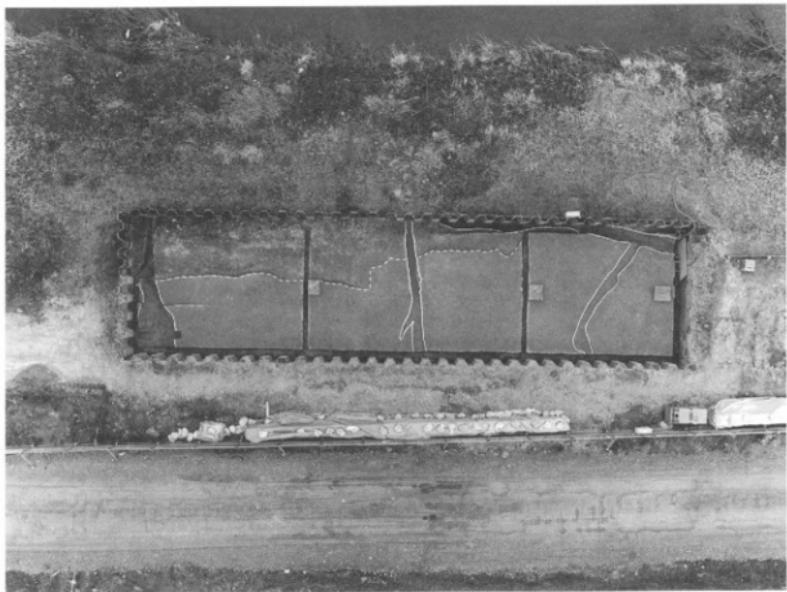
写 真 図 版



1 方吹遺跡遠景（南から）



2 方吹遺跡遠景（東から）



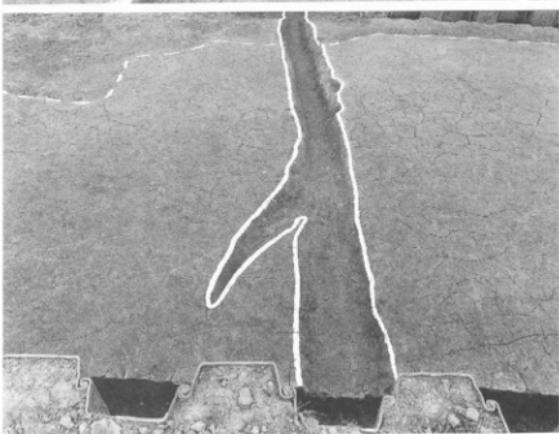
1 左岸区第1遺構面全景（画面上方が西）



2 第1遺構面（南から）



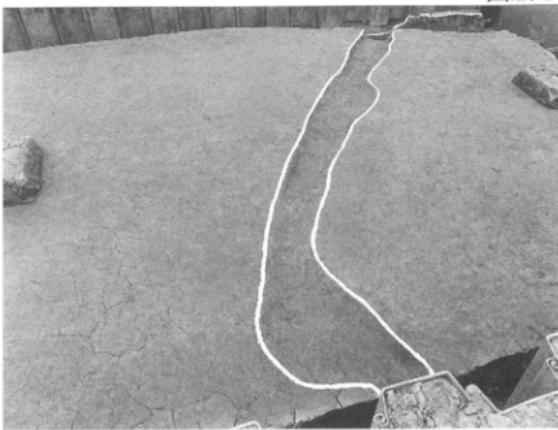
1 S D 0 1 (北から)



2 S D 0 2 (東から)



3 S D 0 3 (北から)



図版5



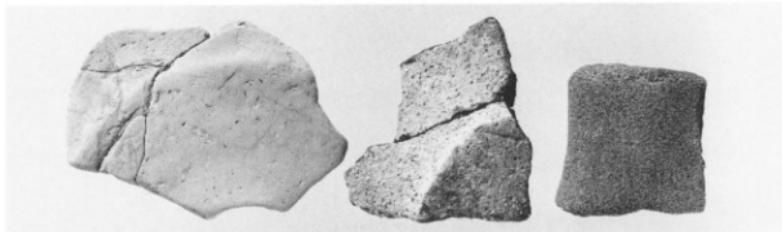
1 左岸区第2遺構面全景
(南から)



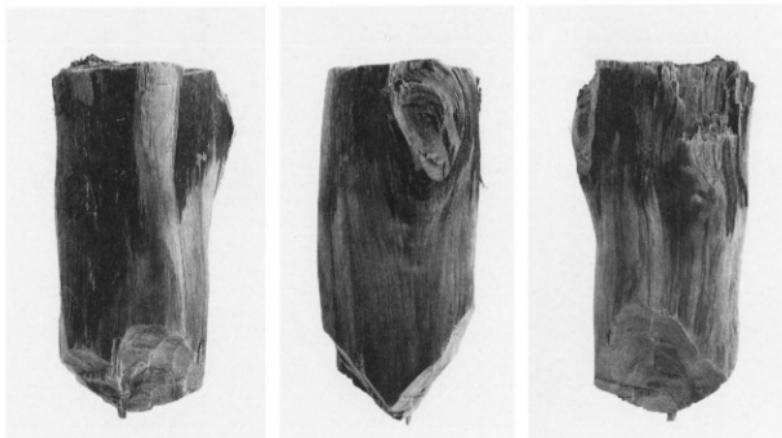
2 右岸区確認トレンチ
(S R 0 1付近 南から)



3 杭出土状況 (東から)



1 出土土器・石器集合写真



2 出土木製品展開写真

報告書抄録

ふりがな	かたぶきいせき					
書名	方吹遺跡					
副書名	主要地方道掛川浜開拓特殊改良1種事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告					
シリーズ番号	第117集					
著者名	藤又直人					
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所					
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 ㈹054-262-4261					
発行年月日	1999年3月31日					
ふりがな 所々遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯/東経	調査期間	調査面積	調査原因
方吹	静岡県小笠郡 葵川町加茂 白岩下地先	22462	34° 44' 42" 138° 5' 04"	1998年2月 1998年3月	338m ² 延<381.8m ²	主要地方道掛 川浜開拓特殊 改良1種事業 に伴う埋蔵文 化財発掘調査 業務
所々遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
方吹	散布地	弥生時代 弥生 中世	自然流路 溝状遺構	弥生土器・枕・自然遺物 弥生・古墳時代土器・砥石		

調査参加者一覧

現地発掘作業参加者

泉地浩和 伊藤房次 小松恵直 高柳登 松原立次 渡部昭次 依田昌一 (以上、五十音順)

現地整理作業参加者

村田浩子

室内整理作業参加者

海野ひとみ 川瀬由美子 桜井典啓 杉浦久子 (以上、五十音)

遺物写真撮影

杉山すず代

石材鑑定

森鷗富士夫

静岡県埋蔵文化財調査研究調査報告書 第117集

方吹遺跡

平成9.10年度主要地方道路川浜開線特殊改良1種事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261
FAX 054-262-4266

印 刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
TEL (054) 282-4031